

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

讀書有感

機とは…。

問題文であれば、

必要があり、しつ

から解けずに諦

いまだ。

以前、みんなの居場所でお話しましたが、私には親友と呼べる友達は2人しかいません。友達は多いのですが、小学校から付き合いが続き、「言いたいことが言える」友達、あるいは「お困りしか話せない話ができる」友達、遠慮しないという「友達は2人だけです。この点を踏まえて、今の子ども達における「友達関係」の現状を、私の個人的な視点で述べてみたいと思います。

最近 SNSが広がる中で「友達関係」にも変化が見られます。その弊害として、よく、常に関連が切れないと不安になる子どもが増えているような気がします。明治大学文学部教授の齋藤孝さんは、この状態をこう呼びます。

「友たちがいないと不安な症候群」

ラインのやり取り等で「既読スルー」なんて言葉がありますが、返事が無いから反達じゃないって考え方自体がナンセンスです。本当の反達ならば、返事が無い時に相手を思いやり「忙しいだろうな」とか「携帯から離れているんだろっかな」と考えることで問題は解決します。そこには互いの信頼関係があります。話をしなかつたって分かるよ、お前のことは」といふような意思の疎通があるのです。逆に「精神的な幼さ」「器用」「相手を慮る心がない」などがあせせんば、常「グループをつくり、そのグループから阻害されない様にいつもひびく」じていて、グループメンバーに嫌われないように自分の意思とは関係ないところでやたらと気を遣っています。このような関係も切磋琢磨の反達関係ではない。「心を通関係」であつて、本当の反達関係じゃないと私は思ひます。

「つるつる関係」は往々にして周囲に悪影響を及ぼします。大体的場合「つるつる」子ども達の特徴として、「一人になんかできない」「精神的に弱い」「正義や真面目をバカにする」「一人になんか何もできない」「等が挙げられます。そしてこのようなグループは低いレベルでの「仲間意識」が生まれ、自分達に都合の悪いことをやきき方、風土を駆逐しようとする。それは社会的に見ると非常に卑怯な行動です。そもそもこのような行動は客観視するどころか格好悪いですね。そして卑怯な行動を続けていると社会的な成熟は望めず、いわゆる立派な人間にはなれません。私達の経験則からすれば、このような子ども達は一般社会に出る前に、周囲から仲間（と思っていた人）達がいなくなります。具体的表現をすると、例としては中学校で友達とじめない、小学校での立場が逆転していじめに遭う、等です。真面目に正義を貫いた子が精神的に成熟していく、コミュニケーションの基本はフェイス・トゥ・フェイス、即ち直接のコミュニケーションを重要視するようになります。そしてSNSは単なる連絡手段として存在するようになり、冷静且つ効果的の活用ができるようになります。直接のコミュニケーションは親友を作るきっかけとなり、長い間連絡が取れていなくとも、いつでも同じように接することができるようになるのです。私の親友もそうです。1年ぶりであっても、話題は充実していた青春時代に戻ります。それは何故でしょう。この理由については次回へ続きます、お楽しみに。

さて、話をもう一度戻しまして、強歩釜釜田は冷え込みました。3月終わりのこと言え、阿蘇内牧です。朝の気温は0度でした。しかし、子ども達はやる気満々です。テレビ局のニュース取材もあり、「がんばるぞー!」おー!」の掛け声で出発です。夏のナイトハイクの反省から、今回の強歩では幾つもの対策がありました。まず、班編成を行い班で行動することを基本とすること。次に班にサボートの車を配置すること。この2点を対策として講じました。この頃は「大人も一緒に歩く」という莽想が低く、また、思い出作りという莽想も低く「精神面を鍛える」という視点が前面に出た感がありました。夏の経験が活かされたのですが、思い出作りのこと、視点は半分程のみです。

出発 天気は曇り、気温は距離が進むにつれ高くなる、比較的歩きやすいという感じでした。しかし、立野を通過するところの痛みを訴える子ども達が出はじめました。熊本空港を通過する頃には雨が降り始め、合羽を着て歩くことになり、益城町から嘉島町に入る頃には本降りとなり、靴(足)は「ジュチャジュチャ」(このニュアンス伝わりますでしょうか?)という感じです。しかも、安全面を配慮して農免道路をコースに入れているため、後半は直線道路が長く続き、足の痛さと雨。そしてイライラも相まって、班によつては陰鬱なムードも流れていたようにでした。ここには想定していたようなので、その都度指導をしました。

「全真でゴールしたくないの?」「ゴールした時のことをイメージして」うん、今何をすべきか、どんなことばかけをすればいいのを見せよう。」

子ども達はハッとして、前を向き直り歩き始めました。強歩の後半はこんな場面が多くなりましたが、その都度、子ども達の心の中では葛藤する場面もあり、それが私のねらいでもありました。雨の中、歩を進める私達。しかし、迷いは無かったですね。ここでストップするなんてことは選択肢にありませんでしたから。正に黙々という表現がピッタリでした。

内牧駅を午前七時に出発して、全真到書は午後六時でした。辺りには真つ暗でしたが、保護者の皆さんの目には涙が光っていました。サポーターの教え子達も、若手足を引く擲りながらも全真到書に、サポーターで来たかどうかは別として、子ども達や保護者の姿、私と歩きながら世間話や人生相談を通して何かを学んでくれたようでした。無事に全員踏破し、を胸に、私は嘉島西小学校を去るのよになりました。(つづ)